

## 「教材研究」

# 井上ひさし「ナイン」論——〈変わらない信頼と友情〉と時代による〈変化〉——\*

藤本 晃嗣\*\*

### 概要

高等学校の国語教科書にしばしば掲載される井上ひさし「ナイン」は、従来〈変わらない信頼と友情〉を主題とするものとして読まれてきた。本論では、小説作品の解釈の多様性を重視する流れを受け、「ナイン」のメンバーの中に差異を見ることが、〈変わらない信頼と友情〉を読み取るものとは異なる、時代による〈変化〉に着目した解釈を提示する。

### はじめに

井上ひさし「ナイン」<sup>(1)</sup>は、一九八三年に講談社のPR誌「IN・POCKET」十二月号に掲載され、一九八七年に短編集『ナイン』（講談社）に収録された。一九八九年には角川書店の高等学校国語教科書『高等学校 新現代文』（三訂版）に掲載されており、その後も数社の高等学校国語の教科書教材になっている<sup>(2)</sup>。

このように「ナイン」は教科書教材として一定の評価を受けているとみなせるが、それにはいくつかの理由が考えられる。教科書教材として採用したものとしては二番目に古い大修館書店の『高等学校 新現代文』（一九九〇年）の『指導書』を見ると「学習指導のねらい」に、「平易な作品」であることとともに、「この作品には文句なしに胸に迫ってくる感動がある」とクライマックスで英夫の語りによって明かさ

れるナインの絆が感動を生み出すものであること、またこの感動が「クライマックスに至るまでの道のりがあって初めて成り立っている」ことなどが指摘されている。つまり、高校生年代の場合によっては小説を読むことに慣れていない学習者でも理解しやすく、また読むことで感動に浸ることが可能である点、またその感動を生み出す物語の構成が、簡潔ながらもクライマックスまで明確に組み立てられている点などに、教科書教材として採用される理由があると言えそうである。

また、「ナイン」において主題とされてきた内容も重要な要因であると考えられる。この点については、田中伸氏がこれまでの指導書や先行論を概観し、「時が流れ社会が変わり、当時の新道商店街から失われたものが多くある中でも、ナインの中に今もなお残っており輝きを放っている信頼や友情、誇り」が主題とされてきたとまとめている<sup>(3)</sup>。先ほどの『指導書』（大修館）にも「登場人物の言動や心情、背景とな

っている新道の変貌などを、しっかりと読み取ることによって、クラ イマックスにおける、ナインの思いやりと信頼で結ばれた友情という 主題に到達する」(『学習指導のねらい』と「友情」を主題とするもの と明確に書かれている。また、この「友情」は「背景となっている新 道の変貌などを、しっかりと読み取ることによって」というように、 物語の中で語られる「新道の変貌」と関連付けながら読み取るものと される。なお、この「新道の変貌」は、「新道の古きよき時代への愛惜 の思いがこめられている。」(『語句の研究・指導のポイント』、第四段) と「古きよき時代」という言葉としばしば結び付けられているように 懐古的な情緒を喚起するものとされている。加えて、物語のメインと なる新道少年野球団や正太郎の存在は、「中村さんにとって新道少年野 球団は古きよき時代の象徴なのである。正太郎の変貌は現在の新道と 似かよったものが感じられるのであろう。」(同)といった形で解釈さ れ、最後の日陰についても、「少年野球団の感動的なドラマも二度と起 こりえなくなったということを象徴的に表している。」(『学習』の解 説)という解釈が示されている。これらからは、もう戻らない「古き 良き時代」に見られた少年野球団のナインが示した「友情」が、時代 の変化の中で現実には見られなくなったものであることを哀しみ、そ れゆえにかつてと変わらぬナインの中に残り続けている「信頼」と「友 情」に対する感動が、より大きなものとして読者に迫ってくる、とい う読み方が想定されているものと推測される。

ここまで正太郎にひどいことをされたのに、少年野球の思い出で正太郎 を許すことができるものなのか、と。この作品ではこのような声をあ らかじめ予測しているかののように、英夫が「おじさんにはわかりませ ん」、「父にもわかりません」と語り、体験したものだけにしか共有で きないものがある、という点が強調される。そして、このようにナインを他の人たちと分ける捉え方は、指導書での解釈にも見られる。例 えばナインがパレードで泣いていたのを、父である中村さんが「よほ ど悔しかったのさ。」と語るのに対して、英夫が「パレードのとき泣い ていたのもうれしかったからです。」と語る齟齬について、「真実は実 際に真夏の炎天下で試合をした本人たちには分からないのである。」 (『指導書』(大修館)「語句の研究・指導のポイント」、第三段)と解 説される。このようにナインと外の人たちを断絶させることは、さら にナインの友情を際立たせる解釈へとつながる要素となる。そしてこ れにより、英夫と知りあいである「わたし」やその父親である中村さ んが理解できないのだから、読者が英夫や常雄の心情を理解できない のは当然である、とでも言うかのように先の素朴な疑問は封じられる こととなる。

一方で、近年の指導書を見ると必ずしもこのような解釈のみが提示 されているわけではないことがわかる。一九九九年に小森潔氏により、 性差の問題から『ナイン』を教室という場で一律に、しかも「友情」 という枠組みで捉えることじたいに、そもそも無理があるということ になつてきはしまいか。」という指摘がなされている<sup>(4)</sup>。三省堂の『明 解現代文B』(二〇一四年)の『指導書』には、「主題についての考察」 で「小説『ナイン』が描いたものは何か。」その問いに答えることが 主題について考察することになるだろう。その主題の把握は、作品の どこに重きをおいて読むかによって、捉え方にも幅が生じるだろう。」

（「教材文の概要」）と指摘され、切れることない絆や少年時代の思い出によって築かれた自信と誇り、失われた共同体の一体感といった従来主題とされてきたものの他に、英夫とその父である中村さんの関係に注目した親子の潜在的な葛藤・子の自立の問題や、「わたし」の視点を重視する読みの可能性などについて触れられている（「研究・発展」）。

実は「ナイン」という教材は、このような多様な解釈の可能性を考える上で極めて適切な教材なのである。この作品は、「わたし」の視点で描かれており、先ほど問題にした常雄の心情にしても英夫の語りを「わたし」が聞いたものにすぎず、常雄自身が語ることはない。つまり、「ナイン」には語られない多くの部分があるのである。教研出版の『改訂版 高等学校 国語総合』（二〇一六年）の『指導書』には、この点をもとに「作品には完全には叙述されていない部分、明言が避けられている部分があり、それらが多様な読みを一層可能にしている」（「ねらい」）と指摘されている。また、「主題」の項では、「「ナイン」から第一に読み取るべき主題は、新道少年野球団の強い結びつきである。」としながらも、「ただし「ナイン」には、新道少年野球団の結束を相対化する視座もあり、それがこの小説に深みを与えている。」と述べられている。そもそも従来主題とされてきた（変わらない信頼と友情）は、あくまでも英夫が語るものに過ぎない。よって、このような野球という共通体験による（変わらない信頼と友情）をかつてのナインのメンバー全てが同じように共有していたのかという点は、自明のものではないのである。

また、この『指導書』（数研）には、「ねらい」の冒頭に「指導のポイント」が次のようにまとめられている。

▼登場人物の置かれた状況や時間の流れに即して内容を把握させ

る。

▼登場人物の心情について根拠を明確にしながら説明できるようにする。

▼必然性のある多様な解釈を生み出す文学の面白さについて理解させる。

これに続く部分で、「作者の意図」は必ずしも作者が執筆時に抱いた意図と同じである必要はなく、読者が作り上げるものである。読者が、作品の表現に基づいた必然性のある解釈を作者の意図として提示するのである。その行為の結果、多様な読みが生まれる」とあることから、この『指導書』が、授業の中で多様な解釈を追究することから求めているのは明らかである。重要なのは解釈の内容そのものではなく、テキスト本文や作品世界から合理的に導き出される解釈を考察するという過程であり、その結果、「多様な価値観」に基づいた多様な読みが生み出されることが期待される。そのためには、先に触れた「完全には叙述されていない部分、明言が避けられている部分」を「必然性」をもって埋めていくという作業を、学生（生徒）それぞれが行っていくことが求められる。

このような「ナイン」の読みの多様化という方向性は歓迎すべきものと言える。そもそも、スポーツを通しての「信頼と友情」や「古き良き時代」という価値観は、決して普遍的なものではない。それは教室内でも同じだろう。団体スポーツに熱心に取り組んでいる学生（生徒）もいれば、そうでない者もいる。多様な学生（生徒）を相手に授業するためにも、様々な読みの可能性を考える必要がある。そのためには、まずは従来の（変わらない信頼と友情）という主題を相対化しておくべきであろう。本論では「ナイン」のメンバーである英夫と常

雄の差異に注目することを通して、〈変化〉を重視する解釈を考察する。ただし、これは一つの解釈の可能性を提示するものであり、「必然性のある多様な解釈を生み出す文学の面白さ」を学生（生徒）に感じさせるための準備作業である。

### 英夫と常雄

最初に物語内の時間の流れを整理しておこう。なお、へへ内はナインの学年と年齢である。

一九六四（昭和39）年末 〈小学四年生。九、十歳〉

※東京オリンピックが開催された年

「わたし」が中村さんの仕事場の二階を借りる。

一九六六（昭和41）年夏 〈小学六年生。十一、十二歳〉

新道少年野球団が新宿区の少年野球大会で準優勝。

一九六七（昭和42）年頃 〈中学一年生。十二、十三歳〉

「わたし」が中村さんの仕事場の二階から出る。

一九七二（昭和47）年夏 〈高校三年生。十七、十八歳〉

英夫が西東京大会で準優勝。

一九八一（昭和56）年冬 〈二十六、二十七歳〉

正太郎が中村さんから畳をだまし取る。

↓英夫が本気で仕事に打ち込むようになる。

一九八二（昭和57）年春 〈二十七、二十八歳〉

正太郎、常雄の自動車学校に来る。

同年夏

正太郎が常雄の奥さんと家を出る。奥さんは後に戻ってくる。

一九八三（昭和58）年秋 〈二十八、二十九歳〉

※王貞治が読売ジャイアンツの監督に就任

現在

さて、従来の解釈において主題とされてきた〈変わらない信頼と友情〉は、小学生のときの野球の共通体験にねざすものであった。先にこの教材を扱う際に、様々な学生（生徒）の存在について触れたが、特に野球に対する思いや体験の有無によって、この作品の読みは変わってくるのが考えられる。「ナイン」における野球の意義について、田中伸氏は次のように述べている。

一つには、広く読者にそれぞれが抱く野球観に基づく感情を喚起する、ということが挙げられる。日本人の生活に根付いた野球は直接球場に足を運んだ観客のみならず、テレビやラジオ、新聞といった様々なメディアを通して多くの人々に届けられている。

夏の甲子園大会を筆頭として、熱戦の模様や各チームのエピソードがドラマティックに伝えられ、そこに人々は感動を覚えるのである。「ナイン」も野球を描いたことで、一人一人の読者の野球観に基づく様々な感情を喚起する物語となっているのである。毎夏、高校野球をめぐるドラマに感動を覚える人は、新道少年野球団ナインの決勝戦でのドラマに感動を覚えずにはいられないだろう。

（中略）このように、「ナイン」は読者が野球に対して抱いている感情を喚起する、つまり、それぞれが抱いている野球観を、作品を通して浮き彫りにするのだ。そして、野球が国民的スポーツとしての地位を獲得しており、様々な媒体を通して多くの国民に共有されていたスポーツであるからこそ、より多くの読者の感情を喚

起することができる作品となっているのである。(5)

引用の冒頭にある「広く読者にそれぞれが抱く野球観に基づく感情を喚起する」という点は、「野球が国民的スポーツとしての地位を獲得しており、様々な媒体を通して多くの国民に共有されていたスポーツである」ことに基づく。このような野球の日本における特異な地位は、教科書に掲載された頃から指摘されていた。『指導書』（大修館）の「鑑賞」に、次のようにある。

野球は我が国において最も庶民性のあるスポーツであり、プロ野球から草野球にいたるまであらゆるレベルで試合が行われている。プロ野球や高校野球に象徴されるように、観戦する人の数も他のスポーツには見られないほど多い。そのため我が国においては、野球は単に勝ち負けを争うゲームとは言い切れないものがある。我々の心の中には、野球に関する様々な体験や思い出があり、それを通して試合を見ているのである。したがって「野球は筋書きのないドラマである。」という言葉に象徴されるように、多くの人々を感動させる共同幻想の場としての要素が強い。

このような野球の特異性に基づいてこの物語は語られている。例えばタイトルである「ナイン」にしても、野球のプレイヤー人数がよく知られる、またテレビなどで野球のチームが「ナイン」と呼ばれることに基づくものである。これがあまり知名度のないスポーツで、プレイヤー人数が知られていなければ意味をなさない。他にも、「王の新政権」という言葉は、王貞治が野球チームである読売ジャイアンツの監督に就任したと了解される前提が働いてこそ機能しているのであり、野球が

国民的スポーツでニュースバリューがあつたことに基づいている。

このような野球の特異性は、甲子園という一大イベントがある高校生にはより強く感じられるものかもしれない。田中氏の先の論には「毎夏、高校野球をめぐるドラマに感動を覚える人は、新道少年野球団ナインの決勝戦でのドラマに感動を覚えずにはいられないだろう」とあつたが、甲子園はしばしば感動的な色彩の中で語られる。そして甲子園のある高校野球は、高校の部活動の中で特別な位置づけが与えられることが多い。筆者（藤本）の高校時代を思い返しても、全校行事として高校野球応援があり、夏の地方大会（全国高等学校野球選手権地方大会）、実質的な夏の甲子園（全国高等学校野球選手権大会）の地方予選）を全校生徒で応援に行っていた。これは、高校野球観戦に一定の教育的意義が見込まれていたからだろう。もちろん、野球部以外の部活動の大会を全校生徒で応援に行くなどというものはなかった。野球による感動や友情、というのは、高校生をはじめ多くの人に共感されるものなのである。英夫の語りは、それを前提に理解することでより受け入れられやすいものとなる。

しかし繰り返すが、教室内においては様々な学生（生徒）がいる。他の運動部の者もいれば、文化部、そして部活動に所属していない者もいるだろう。野球に対する距離感は一様ではない。そもそも三十年前であれば、プロ野球はテレビの地上波で放送され、延長になれば後続の番組が繰り下げられることが当たり前であるほど視聴率の見込めるコンテンツであり、野球に興味がない人でも何らかの形で接する機会が多かつた。「王の新政権」という言葉に象徴されるように、ニュースなどでも頻繁に取り上げられ、国民的関心の一つであつた。しかし、現在状況は大きく変わっている。娯楽の多様化がすすんだ今日において、『指導書』（大修館）にあるような「我々の心の中には、野球に関

する様々な体験や思い出があり」という言葉はどれほどの説得力があるだろうか。実際に「ナイン」を教材に授業をしたときに、「右翼の魚屋の誠」の「右翼」を野球のポジションとしてではなく、政治的な意味で捉えた生徒が存在した。そのような学生（生徒）に、「野球に関する様々な体験や思い出」があるだろうか、また野球が「多くの人々を感動させる共同幻想の場」として認識されているだろうか。もしそのような認識がないのであれば、野球を通しての共通体験に基づく（変わらない信頼と友情）という物語に、共感しづらいものを感じるのではないか。野球に対する思いや経験は、学生（生徒）間で相当な差異があると考えられる。

重要なのは、ナインの間においてもこのような差異が存在するということだが、「ナイン」という作品から読み取れるということである。英夫は常雄についても「常雄にしても、正ちゃんを憎みながら、感謝しているところもあるだろう」と、常雄の思いを自分の気持ちと同じように捉えている。この思いは、少年時代の野球を通じた共通体験によって形成された（変わらない信頼と友情）に基づく。つまり英夫は自らの中の信頼を、ナインの一体性を前提に常雄にもあてはまるものとして語っているのである。はたしてこれは妥当であろうか。

英夫は、少年時代にすでに十九回投げ通して相手チームと互角の戦いができるほどよいピッチャーだった。指導書でも、英夫がすぐれたピッチャーであるとしばしば指摘されている。また、父親の中村さんはスポーツ新聞を読むほど野球好きだったのだから、おそらくかなり小さい頃から英夫に野球を仕込んでいたのだろう。さらに英夫は高校の時に西東京大会で決勝まで進んでいる。これは夏の甲子園の東京地方大会であると考えられるが、英夫がピッチャーなのか、そうではないのか、またレギュラーなのか、補欠なのかなど、こまかな点はわか

らない。ただ、小学校時代に十九回ピッチャーとして投げ通したとと比較する形で語る以上、レギュラーでピッチャーであったと考える方が自然である。

英夫の野球の関わりを考えるために、この西東京大会について考えてみたい<sup>6)</sup>。ただし、現実の夏の甲子園の東京地方大会についていならば、英夫が高校三年生の一九七二（昭和47）年時点では、まだ東京地方大会は東西に分かれていない。この年は第五十四回大会で東京地方大会には百六十四校が参加している。全国で地方大会に総計二六一四校が参加しており、単純に四十七で割るとおよそ五十五となることを考えると、平均の三倍の競争率になる。東西に分けたとして百六十四校を半分にすると八十二校となり平均よりなお多い。二年後の第五十六回大会で東京地方大会が東西に分かれた時は、東九十二校、西八十二校であり、激戦区であることには変わらない。また、英夫が参加することになる第五十四回大会の東京地方大会の結果は、

- 一位 日本大学櫻丘高等学校（日大桜丘）
- 二位 佼成学園中学校・高等学校（佼成学園）
- 三位 拓殖大学第一高等学校（拓大一）
- 三位 駒澤大学高等学校（駒大高）

となっている。日大桜丘のピッチャーは、当時「ジャンボ仲根」とよばれ注目された仲根正広であり、その年のドラフト一位で近鉄バファローズに入団している。なお、その夏の甲子園の前に行われた春の甲子園（第44回 選抜高等学校野球大会）では、その日大桜丘と同じく東京地区の日本大学第三高等学校（日大三）が決勝を戦い、日大桜丘が全国優勝している。決勝進出チームがどちらも東京地区の学校であることから、東京地方大会のレベルの高さがうかがえる。そして、その日大三からも、待井昇が太平洋クラブライオンズからドラフト九位

指名を受け入団している。他にも、東京地区の高校からは、早稲田実業学校の田野倉和男が中日ドラゴンズにドラフト四位で入団している。プロさえも遠くないレベルの選手が出場する大会で、英夫は準優勝したチームにいたことになる。フィクションと現実はずしも一致する必要はないが、英夫の「高校三年のときは西東京大会の決勝まで行きました」という言葉は、相当に野球に打ち込んでいたことを、場合によつてはプロを目指していたことさえも思わせる記述なのである。

重要なのは、そのような野球への打ち込みが、人生や価値観、考え方に強い影響を与えた可能性があるということである。池井優『野球と日本人』には、次のようにある。

しかし野球には「道」がつく。野球道である。訳語が定着している卓球、陸上競技といえども、卓球道、陸上競技道という言葉は聞いたことがない。野球に限って、日本古来の武道である剣道、柔道、弓道などと並び、単なるスポーツとしてだけでなく競技する以前の練習に、あるいは競技を通じて精神修養、人格の向上などを盛りこむものへ変わっていったといえるのではないか。(こ

スポーツや武道が競技者の精神形成に大きな影響をあたえることはしばしば指摘され、またときにはそれがスポーツや武道を行う目的と見なされるが、その中でも日本における野球には特に強く「精神修養、人格の向上」という意義が盛り込まれたことが主張されている。英夫は少年野球時代の思い出として、チームの危機にチームメイトが一団となつて乗り越えようとしたことを語り、そこから「このナインにはできないことはなにもないんだ。」と意義付けるが、チーム一丸となればどんな難局も乗り越えられるという信念の形成は、まさにスポーツ

を通して培うことが求められる「精神修養、人格の向上」の一つであろう。英夫がいつ頃から野球を始めたのかはわからないが、小学生の中ば頃から始めたとしても十年ほどは続けたことになる。これは人格や考え方の基礎が形成される時期の十年である。そして英夫が先の思いを胸にこれまでの人生を歩んできたとすれば、英夫にとって野球は彼の人生に欠かすことができない、ただのスポーツ以上のものだったことが推測できる。

しかも英夫は父親が二〇年近くたった今でも、「新道少年野球団は強かった」と話をするような環境にいたので。小学生の時の決勝の経験を「このナインにはできないことはないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちはいまでもどこかに残っていると思います。」と語る英夫にとって、野球は人生においてかけがえないものがあり、その人生を支える信念を形成した原体験としてナインによる陰づくりがあつたことを考えると、正太郎をその体験と結び付けて語るのは、極めて自然なことである。

高校以後の英夫については、正太郎に騙されるまでの九年間は何も語られていない。大学や別の学校などに行ったり、就職したりした可能性もある。しかし少なくとも、野球という面では、小学生のときの新道少年野球団、高校三年生のときの西東京大会決勝以上の出来事はなかったことは確実である。そうなると高校以後に野球との関わりが薄くなつていたことが推測される。正太郎に騙され「本気で仕事をするようにな」る前の空白と言える九年間は、野球というそれまでの人生の軸や目標を失つていた時期として読むことができる。

そうであるならば、事件を起こした正太郎に感謝している、というのはあながち正太郎をかばうために作った嘘ではないのではないか。英夫にとって正太郎の事件は、喪失感から脱し、仕事自体にやりがい

を感じ、人生に新たな目標を見つけてきたことが考えられる。現在の英夫は父親に認められるほどに腕があるようだが、正太郎の事件は二年前であり、つまり二年間本気になったことで後継ぎとして問題ないとみなされるほどにまで成長していることになる。正太郎が「ぼくらのためになることをして歩いている」というのは、少なくとも英夫自身にとってはまったく本心にはないものではないと考えられる。

それでは、このような野球の意義を、同様に常雄にも見ることは可能であろうか。常雄の小学生以後については、タクシーの運転手になるまでは全くの空白である。常雄の野球への取り組みとして示されるのは、「弱虫の八番打者」であり、ポジションが左翼（レフト）であったこと、また決勝の日に倒れかけたということである。八番打者は決して打力を期待されるわけではない、所謂下位打線である。また左翼（レフト）は、少年野球では基本的に運動神経が悪いものがつくポジションとされる。また、強い日差しを他の選手が持ちこたえる中、常雄のみが倒れかけたということは、必ずしも体が強くなかったことを思わせる。少年時代の描写を考えると、その後の常雄が英夫ほどに野球に打ち込んだことは考えにくいのではないだろうか。しかも、後で問題にするように常雄は新道から出ており、「ライオンズもジャイアンツも問題じゃないとでもいうような」口調で新道少年野球団を語る人も周囲にいなかったであろう。少なくとも英夫と常雄には、野球に対する思いや人生において持つ意義に差異があることが考えられる。「ナイン」というタイトルは、あたかも九人が一枚岩であるかのような印象を与えている。しかし、そんなわけではない。野球に対する思いはそれぞれ違うはずであり、そうであれば当然、少年野球の大会の出来事に対する思いも変わってきてもおかしくはない。この日陰の出

来事について、エースピッチャーであった英夫について次のように指摘される。

相手チームの攻撃を抑えなければという重圧のあまり、孤独な心理状態に陥りがちな投手にとつて、共に闘う人人の仲間の存在が見え、改めて「ナイン」で闘っているのだという連帯感、一体感を認識したことは間違いない。そのときの感動が、二十年近く経った今なお、英夫の中で生き続けているということなのだ。(8)

これは、英夫の「このナインにはできないことはなにもないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちはいまでもどこかに残っていると思います。」という言葉を解釈したものであり、妥当なものである。それではこのような解釈をもとにしたとき、これに続く英夫の言葉「だから……。」をどのように考えることができるだろうか。この「……」という空白については、同じ思いを常雄も抱いているだろうと、英夫が考えているということを読み込むことが可能だが、はたして左翼の八番打者で、陰をつくる力に途中でなれなくなった常雄が、孤独に闘いチームを引っ張って来たときとされる英夫と同じ「連帯感、一体感」を認識しえたであろうか。例えば、正太郎に感謝はしつつも場合によっては、自分だけが耐えられなかったと劣等感に繋がる記憶となる可能性を想定することもできるのではないだろうか。少なくとも、先に示した解釈のような英夫の認識とは異なる思いを抱いたはずである。そうであるならば、野球のポジション、つまりチーム内の立場の違いによって、その体験のあり方が決定的に変わる可能性を考えるべきである。

英夫と常雄にこのような差異を認めるならば、英夫の語る〈変わら



ない信頼と友情」により正太郎を許したという物語を常雄にあてはめることはできない。このことは、常雄の正太郎に対する思いを野球による信頼以外の観点から捉える可能性を開くものである。それでは、常雄が正太郎を許したことにはどのような理由が考えられるのか。

### ナインのその後

「ナイン」においては、〈変わらない信頼と友情〉が新道の変化と対比される形で描かれ、それによりナインの結末をより強く印象付けている。この作品では新道の変化を通して過去と現在との対比が描かれているわけであるが、この対比は、少年野球大会があった一九六六年から作品の現在である一九八三年の間に、日本の高度成長とそれに伴う社会の大変革の時期がはさまれていることで、より増幅されるものとなっている。作品内で描かれる新道の変貌は、この時代の社会の変革の典型例を示すものと読める。

この「ナイン」に描かれた時代の変化を捉えるときに注意したいことがある。それは、この変化の主語が「新道」になっていることだ。このことにより、あたかも新道の変化が、その中にいる人に同じように襲ってきたかのように錯覚させられることになる。しかしそんなはずはない。先ほど、ナインの野球に対する姿勢の差異を語ったが、当然そのような差異は社会の変化の影響という意味でも見る事ができる。そしてこのことは「ナイン」の作品内にはつきりと書き込まれている。それは、ナインの進路だ。ナインについて「ばらばらになってしまったさ。」と語られ、「みんな新道から出ていってしまったねえ。」とされるが、そのあり方は一様ではない。

ナインのそれぞれの進路は次のようになる。

- ・ 英夫（投手（ピッチャー））→「畳屋」→畳屋
- ・ 正太郎（捕手（キャッチャー））→

「洗濯屋」↓？（寸借詐欺）↓不動産会社（？）↓？  
↓常雄の自動車学校の事務員↓？

- ・ 明彦（一塁（ファースト））→「洋品屋」↓丸の内の会社勤め
- ・ 洋一（二塁（セカンド））→「お総菜屋」↓新宿のホテルでコック
- ・ 忠（三塁（サード））→「ガラス店」↓コンピュータ技師
- ・ 光二（遊撃（ショート））→「文房具店」↓神奈川の中学校教師
- ・ 誠（右翼（ライト））→「魚屋」↓放送局の前で小料理屋
- ・ ？（中堅（センター））
- ・ 常雄（左翼（レフト））

「豆腐屋」↓タクシー運転手↓自動車学校経営者

英夫のみは家業を継いでいるが、それ以外の者たちは別の形で生計を立てている。その中でも、例えば二塁の洋一は実家がお惣菜屋であったが、ホテルでコックになるといいうように、調理関係という関連性の高いものについている。そしてこのような傾向は他の数名にも少なからず見られる。このようなナインの変化について、小森潔氏は次のように述べる。

それぞれのメンバーが、時代の推移に合わせて立身出世といつてはオーバーだが、さびれる街で家業を継ぐよりはあるいは充実した、しかもいささか家業と関連した職に多く就いていることが確認できる。そして、家業を継いだ英夫と家業とは全く関係のない世界に入った常雄の二人が、正太郎に騙されたというかたちに

なっているのである。これを、全く変化のないものと変化しすぎたものに試練が課された、と読むことは可能だろう。(8)

先ほど野球について英夫と常雄の差異を見てきたが、時代の変化による影響という点でもこの両者には隔たりがあるのである。新道に残り、親の職を継ぐというかつてと変わらない英夫に対して、常雄は家業とは全く関係のない世界に入るといふ変化の中に身を置いている。

そして、二人の間に配されるかのように、他のナインはかつての家業と一定の関わりを持つ職業についている。つまり、新道とのつながりという点において、ナインの間には差異があることが示唆されている。

さて先の小森氏の指摘において、常雄が「家業とは全く関係のない世界に入った」とされていたが、もう一人、家業と断ち切られたであろう人物が存在する。正太郎である。正太郎の仕事はよくわからない。不動産にしても、本当かどうか不明な上、それまでは寸借詐欺をしていたとされる。また「これまでいろいろと心配をかけてきたが、今度こそ性根を据えてやる決心だから」といふ言葉からは、職を転々としていた可能性を思わせる。この正太郎の空白を考えてみたい。

新道商店街に見られるような、小売業の変化について、次のような指摘がなされている。

戦後のわが国の小売商業界における大きな変化は、まず小売総売上高に占める小規模零細な小売商のウェイトが漸減し、比較的大規模な小売企業のウェイトが漸増して、売上高の上位集中の傾向が次第に強まってきたことである。(9)

このように小規模な小売店の減少は、よく知られるようにスーパー

マーケットの台頭によるものである。石川寛治『日本流通史』には、一九六〇年代以降にスーパーマーケットが発展し、零細小売店に対して優位性をもち、小売業界の大規模化が急速に進むという期待が生まれたことが指摘されている(10)。このような変化は、それまでの生活空間であった商店街に多大な影響を与えたであろう。

さて、このような変化の特徴は、一つは大形化であるが、もう一つ、家族経営からの脱却という面があった。

商業的労働者の雇用が近代的商業資本にとつてのひとつの要件であるといつてよい。逆にいえば家族従業員への依存率が高いほど商業経営は前期的であるといふことができる。ところがわが国の場合その割合は表・6(表は略)にみられるように諸外国にくらべ極めて高いのである。(11)

古い経営の特徴として家族経営が指摘されている。今でもその傾向はあるが、零細な小売業においては、家族がその構成員の中心となる。ナインがそれぞれの家業をもとに呼ばれているのは、このような「前期的」な意識の表れとしても見ることができかもしれない。このような家族との関係は、将来的な家業とのつながりのポイントとなるだろう。

さて、正太郎の家の家業である洗濯屋であるが、家業的側面が強く、特に主人の奥さんの働きが重要であり、また息子といえども後を継ぐには厳しい修業が必要であったという指摘がある(12)。ところが、正太郎の家は「洗濯屋はしよつちゅうもめていたからね、大将の女出入りで。そのたびにものすごい夫婦げんかになり、そのたびに正太郎のやつは家を出していたねえ。」とあるように家族による経営という基盤は

強固ではなかったことが推測される。さらに、正太郎がしょっちゅう「家出」をしていたというのは象徴的である。いわば、多くのナインが新道で生活していた親と一定のつながりのある職業を選択している中で、「家」、つまり家族とのつながりの弱いものとして正太郎は描かれている。そのことは新道と離れねばならない存在であることを意味する。

正太郎と常雄はこのように、新道とのつながりから離れ、高度成長期の中を新たな世界に飛び込んだものと考えられる。英夫は家業を継ぎ、何人かは程度の差こそあれ家業と一定のつながりを保ちつつ新たな仕事を見つけ、正太郎と常雄はこれまでの共同体から離れ新たな世界に飛び込んでいった。このように、高度成長の影響とは言っても、そこには無限のグラデーションが存在した。このことが、この時期の変化が「新道」という主語で語られることで見えにくくなり、その中の差異が隠されている。

このことに注目した時、ナインの〈変わらない信頼と友情〉を口にする英夫が、新道の中に居続けることができたということは重要な意味を持つてくる。つまり英夫は、新道の内側の価値観の中にいる存在なのだ。そして、「ナイン」は基本的にこのような価値観の中での語りとなっている。例えば、ナインのそれぞれについて聞かれた中村さんが「ばらばらになってしまったのさ」と語る時に「ちよっと目を伏せた」ことについて、『指導書』（数研）に「中村さんの無念さややるせなさが込められている。」（「授業研究」、九八頁）とあるように、中村さんの感じている無念さや寂しさを読み取るものとされている。中村さんの思いの読み取りとしては間違っではないが、出て行った側の人たちが同じ思いを抱いているかは別問題である。例えば、一九六二年に発行され、同時代における変化を予測的に語りベストセラーとな

った林周二『流通革命』には次のように記されている。

これまでわが国で、小売商の総軒数があまりにも多すぎたのは、サラリーマンや労務者を志願するよりも、小売商を営んだほうが楽な暮しができる、サラリーマンなどは「労働のほか何物も売るもののない人間のやることだ」というような一部の社会通念が、あずかつて力があつたことの結果であるように思われる。（中略）

だが鶏頭（Ⅱ零細経営者）よりも牛後（Ⅱ大企業のサラリーマン）のほうがよい時代が訪れた。さいきんでは小売店の息子たちが、家業を継ぐことを嫌がりだした事実がいたるところにあるけれども、この事実は、これまで述べてきたような理由から、国民経済的に望ましい現象だといわなければならない。『朝日ジャーナル』（一九六二年四月二十二日号）のなかに「商店主は訴える」という一文（筆者は松永多会子氏）があり、そのなかに、つぎのような一節がみられる。

「私の知っている都内杉並の生菓子製造、つまりちよっと「格」のある菓子司の一人息子は、東大工学部を卒業し、一流会社に就職した。現在も、ちかい将来とても収入はとうてい父親の商売に及ぶべくもないが、やはり社会の受けいれ方も本人の生甲斐も、この両方を比較して違うのだろう。老齢の両親はやむをえず職人氏に店を譲り、その権利金などでアパート経営に切りかえながら隠居することになった。こんな例はどこにもいくつもあることだろうが……」<sup>14</sup>

このように家業を継がず、自発的に新たな道を探し始める者もいたようだ<sup>15</sup>。一貫して新道に住み続ける中村さんにしてみれば、新道か

ら人が出ていくことは残念なことである。しかし、新道という共同体の外から見れば、異なる捉え方の可能性もあるのではないか。確かに、家業が継続できない等の時代の流れの中で仕方なく出て行った人もいるだろう。しかし、「ナイン」内には、「親たち競争で土地を処分してしまった」ともあるように、時代の変化を肯定的に捉え、その流れに自らのつていった人たちも多くいたことが考えられる。

そもそも新道にしても、このような変化を簡単に否定できるものだろうか。地方に行けば昔のままの商店街が残るところもあるが、さびれてしまっているとこともよく見かける。そしてそのようなさびれた商店街は、古い店を多く残している。内部の人たちだけでやりくりすることが維持できるならばともかく、外部から新しい店が来て、外部の客が来るようになった街と、古い店が残ったままで、外部から人が来ない街、どちらが良いかは一概には決められない。作品内に「いまはたしかに華やかな小路になっているけれど、外からやってくる客の懐中をあてにしないとやってゆけない」というところを見せて、なんだかもろい通りになったような気がしてしかたがない。」とあるが、「外からやってくる客」からすれば、外からも行きたいと思うような「華やかな」魅力的な場所になったということとして捉えることも可能ではないか<sup>(16)</sup>。

このことは新道の「自給自足」に関わる。この「自給自足」は、「たいていの日用品は新道のなかにある店屋で十分に間に合っており、それらの店屋はまた新道に住む人たちだけを相手にして、とにかく暮らしが立っていた。」と外部との遮断が可能であることを意味するが、「古き良き時代」という価値観は、外部的な価値観を遮断することで成り立つものである。つまり、新道が紡ぎだす物語、「古き良き時代」という価値観の存在は、新道の内部の人たちの間で語られていることによ

るものなのだ。多くの人が出ていく中、一貫して新道に住み続ける中村さんが語る「古き良き時代」の話に対して、かつてそこに住み愛着を感じているであろうがために共感することができ「わたし」が、物語の語り手だからこそ、新道の変化に対する懐古的な思いは成立している。しかし外部的な状況を考えると、そこには異なる物語が存在する可能性が見えてくる。

このような点に注目するとき、英夫の語る少年時代の共通体験をもとにした〈変わるらない信頼と友情〉とは、新道に住む英夫だからこそ物語であるということが見えてくる。新道から離れた、もしくは離れざるを得なかった常雄と正太郎という存在を考えた時、常雄が正太郎を許したことには、この二人の間に別のつながりを見なければならぬ。それは一体何であろうか。

### 正太郎と常雄

さて、常雄と正太郎が新道を出て、違う世界に飛び出していった存在であると捉えたとき、両者はどのように位置づけられるであろうか。

先ほど、新道から外へ出ていくことについて、新道に居続けた中村さんとは異なる捉え方の可能性に言及した。それが最も明確に表れるのは常雄ではないだろうか。もし常雄が英夫のように新道にとどまり親の家業を継いだとすれば、豆腐屋になることになる。たとえこの豆腐屋が営業し続けられていたとしても、自動車学校の経営者の方が出世したと言えるだろう。このことは作品内における「わたし」の「その若さで自動車学校を経営するなんてすごいじゃないですか。」という言葉からも読み取ることができる。常雄は新道から離れ成功した存在と言える。

一方、正太郎については先にも述べた通りよくわからない点が多いが、寸借詐欺を働き、かつての友人をだまし、「わたし」に「どうしてそこまで崩れてしまった」と語られるように、落ちぶれたと考えてよい。つまり正太郎は新道から離れ失敗した存在として語られている。

さて、この二人は新道の側から見た時にどのように映るだろうか。この二人は新道を離れ、時代の変化の中に飛び込んでいった。もちろん、社会的な成功が人生の成功や幸せをそのまま保証するものではないが、「古き良き時代」というかつての新道をよしとする考えに対して、常雄は共同体を出て変化することを肯定する存在となる。逆に、変化の中で落ちぶれてしまった正太郎は、変化を否定する存在と言える。

正太郎の変貌について、『指導書』（大修館）に「中村さんにとって新道少年野球団は古き良き時代の象徴なのである。正太郎の変貌は現在の新道と似かよったものが感じられるのであろう。」（語句の研究・指導のポイント、第四段）という指摘がなされているが、正太郎の変貌が落ちぶれていくものだからこそ、このような解釈が成り立つのである。常雄の成功が新道の変化と重ねあわされるものとはされない。そうであるならば、むしろ正太郎は新道の中で語りたい存在とも捉えることが可能となる。中村さんが落ちぶれた正太郎を語る時に、「それまで以上に能弁になった」とあり、この部分はしばしば授業の読解の問題にもされ、悪事を働いた正太郎を許す息子の理解できない行動を、誰かに聞いてもらいたいという中村さんの思いとして説明される。しかし、変貌した正太郎が落ちぶれていることは、「古き良き」昔を思い出させるものであり、新道の変化を否定的なものとして捉える考えに合致しており、むしろ積極的に、つまり「能弁に」語りたい話題であると言える。

このように、正太郎は失敗し、常雄は成功したわけであるが、その

明暗を分けたものは何であろうか。新しい世界に入ることには不安定な要素がつきまとう。例えば常雄がはじめについたタクシーの運転手であるが一九七〇年代はタクシーの値上げが頻発した時期で、また労働環境も決してよくはなかったようだ<sup>(17)</sup>。また、二度のオイル・ショックもあり、そのたびに大きな影響を受けている。その一方で、「3C」（カラーテレビ・クーラー・自動車）という言葉でよく知られるように、自家用車をもつ家庭は増えていった。一九七六（昭和51）年度の『運輸白書』には「第三章 モーターゼイションの進展」として次のようにある。

昭和四十年代において、我が国のモーターゼイションは一段と進展をみせた。四十年代末には八一二万台であった自動車の保有台数は、五十一年八月末には三〇九〇万台を突破しており、国際的にみても我が国は米国に次いで世界第二位の自動車保有国となっている。

自動車の運転免許所持者も逐年増加してきており、五十年末には三三五〇万人を数えている。自動車の運転免許取得が可能となる一六才以上の年令では一〇人のうち四人が、また、年令二〇才以上五〇才未満の働き盛りの成人男子では実に五人のうち四人までが運転免許を所持している。<sup>(18)</sup>

このように昭和四十年代から五十年頃にかけての自家用車の普及、またそれと並行して免許取得者の増加が語られているが、この傾向は昭和五十年代も続いたようである。昭和五十七年の『警察白書』には次のようにある。

運転免許保有者数は、図 6・5 (図は省略) のとおり一貫して増加傾向にあり、五六年一二月末には約四五〇〇万人に達した。

最近、女性運転免許保有者の増加が目立ち、最近五年間の増加数は、男性が約四二六万人であるのに対し、女性は約五五七万人とこれを上回っている。また、この間の増加率も、男性が一五・八%であるのに対し、女性は六七・九%となっている。

また、運転免許保有者数は、一六歳以上の運転免許適齢人口の五〇・七%を占め、特に、二五歳から二九歳までの年齢層の運転免許保有率は、男性が九〇・八%、女性が五六・五%と高くなっている。<sup>(19)</sup>

このように運転免許取得者は増加し続けていた。自動車学校の経営というのは、時代の流れに合致するものであったと言える。

一方で正太郎については、先ほども指摘した通りついた仕事はよくわからない。不動産の仕事も本当についていたかは疑わしいが、不動産は本文に「ここの地価は高い。三、四十坪の狭い土地でも、処分すれば郊外に家を建てたうえ、びっくりするほどのお釣りがかえってくる。」とあるように、当時土地の値段が上昇していたので、時代にあった仕事であったのかもしれない<sup>(20)</sup>。正太郎が不動産業についていたのであれば、両者とも時代の流れにあった仕事を選んだとみなせる。

もちろんどのような職業も時代の変化の影響を受けることは同じである。だが、それが今までの生き方とつながりがなければさらに見通しは困難になる。先にタクシー業界が時代の変化の影響を受けていたことに触れたが、不動産や住宅業界も同様であろう。例えば、『朝日年鑑』を見ると、正太郎が詐欺を働いた一九八一年には、「住宅着工の不振が続く」との見出しで、「住宅不況はまだ当分続く」、「住宅業界では

住宅建設は年間一〇万―一二〇万戸の低成長時代に入ったという見方がふえている。」とあり、他にも「売れ行き不振で住宅値引き競争」との見出しもある<sup>(21)</sup>。必ずしも景気がよかつた時期ばかりではないのだろう。

その中で、常雄は自動車学校の経営者となり成功したわけであるが、その要因は何だろうか。「わたし」は「常雄くんが自動車学校の経営者とは意外でした」と述べるが、この「意外」というのは、「やつと三十歳」という若さで経営者をしているというのもあるが、おそらく「わたし」に小学校時代の常雄の記憶があり、その比較から「意外」と言っているものと考えられる。そしてその後で、それが「社長の娘に見初められた」ことによるものと明かされる。もちろん常雄が金持ちをしたたかに狙った可能性もあるが、「見初められた」という語られ方は、常雄の主体性を感じさせるものではない。つまり本文においては、常雄の成功は、常雄の個性と結びつけられているのではなく、どちらかと言うと社長令嬢に見初められたという幸運によるものとして語られているのだ。そうであるならば、これは運であるため必ずしも常雄に転がってくるわけではない。成功の要因は「見初められた」ことである。このように考えると、事務員として雇われた正太郎が常雄の奥さんと「ねんごろ」になったという挿話は、きわめて重要な意味を持つてくる。常雄の奥さんは、常雄が変化に身を投じた成功した要因の言うならばシンボルであり、それを同じく変化に身を投じた正太郎が奪おうとする。この出来事は象徴的なものとして、正太郎がこの幸運をつかんだ可能性があることを示すものではないだろうか。つまり常雄の成功は、同様に正太郎にも転がってくる可能性があったわけである。

このことは彼らの〈変化〉に関わる。「弱虫の八番打者」であった常雄が経営者をしてることが「意外」とされていたが、正太郎も「ど

うしてそこまで崩れてしまったのか」と言われるように、その〈変化〉は「意外」なものとして語られていない。これまでの共同体を出て、新たな世界に入っていくときには、偶然や運の要素が深く入りこみ、その偶然や運の中で人は〈変化〉していく。ましてや社会の変革が激しい時期であれば、なおさら予測は難しく、必然的なものとは捉えられない偶然による〈変化〉が生じるであろう。そうであるならば正太郎が社長令嬢に見初められるといった類の幸運をつかんで成功した可能性もあれば、常雄が逆に失敗した可能性もあったのかもしれない。常雄にとって、落ちぶれてしまった正太郎の〈変化〉は決して自分と遠い出来事ではない。

中村さんは自殺をはかった常雄を「あの常雄が菓を飲む光景を思い浮かべると、そのたびに涙が出てしかたがない。あいつは弱虫の八番打者でねえ、死ぬということはいちばんこわがっている子なんだ。その子が死のうとした。よほどつらかったにちがいない……」と語るが、ここで語られる常雄は小学生の時の印象を現在の常雄に引き伸ばしたものである。このことと、英夫が現在の正太郎を「正ちゃんは一見、悪のように見えるけど、やはりぼくらのキャプテンなんです。結局は、ぼくらのためになることをして歩いているんだ。」と語る姿勢は、実は小学校時代の印象の中で現在の彼らを捉えているという点で全く同じものなのだ。新道的な価値観では、「古き良き時代」として〈変わらない信頼と友情〉が強調されているのを見てきたが、逆に言えば〈変化〉が見えていない。しかし、家業から離れ新道を出た常雄であれば、同じく新道を出た正太郎の〈変化〉が、時代の変化の中に身を投じざるを得なかったことによるものだと理解できるのではないか。

少年野球時代、英夫と正太郎はピッチャーとキャッチャーとして最も強く結びつき、またバレードでも二人で先頭に立つという、チーム

の中で近い立場（ポジション）にいた。それゆえに、野球を介して正太郎と心を通わせようとし、「やはりぼくらのキャプテンなんですよ」とかつてのままの正太郎を思い、〈変わらない信頼と友情〉を口にする。一方、常雄は、高度成長による社会の大変革の中で、互いが近い状況（ポジション）にいたという結びつきで正太郎を理解し、その〈変化〉を受け入れることが可能であったからこそ、正太郎を許すことができたと考えられるのである。

## まとめ

教室内に多様な学生が存在することを念頭に、多様な読みの可能性の追究として、従来の指導書で説かれてきた〈変わらない信頼と友情〉を主題とするものとは異なる「ナイン」の解釈を示した。本論での解釈のポイントは、ナインの中に差異を見ることが、また新道の外部からの視点を考えることにある。このような観点は教室で「ナイン」を考察する上でも有効なものであろう。例えば、同じ教室で同じ制服を着て、同じように授業を受けるといって、一見すると似た者同士のようでも、実はそれぞれの置かれている状況は大きく違っていたりする。相互理解において、互いの差異への眼差しは欠かすことができない。同じように見える行動でも、それぞれの状況において意味付けが変わることを認識するということが重要なことである。

繰り返すが本論は今回提示した読み方が唯一の正しい解釈であると主張するものではない。例えば本論では、英夫と中村さんの間に差異を見なかったが、「はじめに」で触れたように、両者に世代の問題を見ることも可能であろう。また、語り手である「わたし」の立ち位置に注目することもできる。他にも「ナイン」というテキストから異なる

解釈が引き出せるものと考えられる。

このように、授業で小説を教材として扱う際に解釈の多様性を追究することは、一人一人の学生（生徒）の多様性からも必然の要請であると思われる。この点を考えるために、一般の学習指導要領の改訂に対して述べられた安藤宏氏の次の見解を参照したい。

今回の学習指導要領やその「解説」を読んでいて哑然とするのは、「文学」に対するおどろくほどの無理解と偏見である。「論理」「実用」は社会に役立つ実践的なトレーニングであり、「文学」は伝統文化への理解を含めた情操教育である、というのが発想の基準になっているようだが、これでは「文学」を生きた社会から切り離し、閉域に囲い込むことにしかならないだろう。これに関連して、「改革」する側が教室の授業の悪しき例としてしばしば言挙げするのは、「教師が自分の好きな小説や詩歌を恣意的にとりあげ、根拠のないまま、漫然と感想を述べ合っている。これではこれからの高度な情報化社会に対応はできない」という、「ストーリー」である。こうした批判に対して「文学」を守れ、と反論したとしても、結局は同じ「文学」観に立った上での議論に終始してしまうことだろう。問題の核心は、世界や人間の成り立ちを根源から問い直す「人文知」への無理解にこそあるわけで、言葉は社会を切り開いていく手立てにほかならず、自己とは異質な他者、世界観を学んでいくためにこそ「文学」が必要なのだ、という「論理」を、広く打ち出していく必要がある。その意味でも闘うべきは、「指導要領」そのものよりも、さらにその背後にある、文章の「読解力」をめぐる社会の価値観そのものであるといつてよいだろう。「読解力」の養成とはあらかじめ答えが用意された一対

一の応答のトレーニングではなく、言葉の多義性、コンテクストの重要性への理解を深めていく営為なのだ、という根本が置きりにされているように思われてならない。<sup>22</sup>

授業において小説を含む「文学」にいかなる位置づけを与えるのか、という点については、今後も問題となっていくものと思われる。ただ少なくともその扱い方については変化が求められているし、さらに言うならばこれまでも変化が求められてきた。このことは、本論の「はじめ」で確認した指導書の内容の変遷からもうかがうことができる。単に学生（生徒）に指導書にある特定の解釈をただ教えるというだけでは、「教師が自分の好きな小説や詩歌を恣意的にとりあげ、根拠のないまま、漫然と感想を述べ合っている」という批判を免れることはできない。そのようなことを考えた時、安藤氏の述べる「言葉は社会を切り開いていく手立てにほかならず、自己とは異質な他者、世界観を学んでいくためにこそ「文学」が必要なのだ、という「論理」を、広く打ち出していく必要がある」という主張は重要なものと感じる。小説は、誰もが自らの解釈を生み出しやすい教材である。同じ小説を読んでも、多様な解釈が生まれてくるだろう。例えば「ナイン」であれば、野球経験の有無で、作品受容のあり方は変わってくる。学生（生徒）それぞれが自らの感じたことをもとに作品の解釈を考え、相手に説得できるように説明すること、また逆に他の者の解釈やその説明を聞いて理解していくことは、「自己とは異質な他者、世界観を学んでいく」という営みにつながるものである。また多様な解釈、意見を知り考察する中で、「あらかじめ答えが用意された一対一の応答」ではない、「言葉の多義性、コンテクストの重要性への理解」が深められていくものと考えられる。これは『高等学校 学習指導要領』で「国語」の目



標とされる「生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす」、「言葉のもつ価値への認識を深める」<sup>23</sup>ということにも合致する。「小説」を授業で扱う際には、先に述べたような小説の特徴を活かすべきだろう。そして、学生の出す多様な解釈を受け止め、伸ばしていくためにも、教員側は常に扱う作品の様々な解釈の可能性を追究することが求められている。

#### 【注記】

1 「ナイン」本文の引用は、『高等学校 国語総合』（数研出版、二〇一六年三月）所載のものによる。

2 『教科書掲載作品13000』（阿武泉監修、日外アソシエーツ、二〇〇八年四月、67頁）参照。同書から、一九八九年から二〇〇七年の間に、角川書店、大修館書店、第一学習社など七社の計二十種の国語教科書に掲載されたことがわかる。また、その後もしばしば高等学校国語の「国語総合」や「現代文」の教科書に掲載されている。なお、今回参照し得た指導書は『高等学校新現代文・指導資料』（大修館書店、一九九〇年四月、『指導書』（大修館）と略記）、『高等学校新現代文・指導資料』（大修館書店、二〇〇〇年四月）、『明解現代文B・指導資料』（三省堂、二〇一四年三月）、『国語総合・高等学校・教授資料』（数研出版、二〇一七年三月、『指導書』（数研）と略記）の四種である。

3 田中伸「井上ひさし「ナイン」論——共同体がもたらす蔭——」（『信州大学教育学部研究論集』第9号、二〇一六年）。

4 小森潔「『教科書』の中の女と男」（『女と男のことばと文学——性差・言説・フィクション』（叢書・文化学の越境5）森話社、一九九九年三月、229頁）。

5 田中伸「井上ひさし「ナイン」論——共同体がもたらす蔭——」以下の甲子園に関する記述は、『全国高等学校野球選手権大会70年史』（朝日新聞社、一九八九年六月）、『選抜高等学校野球大会60年史』（毎日新聞社一九八九年一月）による。

7 池井優『野球と日本人』丸善、一九九一年六月。

8 川田裕美子「ナイン」（井上ひさし）について——生き続ける友情の絆」（『国語教室』54号、一九九五年）

9 小森潔「『教科書』の中の女と男」（『女と男のことばと文学——性差・言説・フィクション』229頁）。

10 佐藤肇『日本の流通機構』（再版）、有斐閣、一九八四年二月、193頁。

11 石川寛治『日本流通史』（有斐閣、二〇〇三年一月）の「第24章 総合スーパーの発展と流通革命」（221頁〜232頁）参照。

12 『現代の流通機構』、世界思想社、一九七四年九月、128頁。

13 今回、当時の洗濯屋について十分な調査ができなかった。ただし、ブログ上に掲載されている、卒業論文の要旨であるが、次のような指摘があった。

洗濯屋の大きな特徴としてまた、家業的側面が強いということが挙げられる。大抵の洗濯屋では家族の誰もが仕事を手伝うことになる。特にその中でも最も大きな仕事の功労者は主人の妻であると言える。職人に影響され、多くの妻の仕事にかける精神はとも強く、職人に負けないような仕事振りで彼らと競ったり、仕事を覚え、結果として職人化することもある。

こうした家庭と職人体質の入り混じる洗濯屋では、家業として跡継ぎをする者が現れても一切手加減されることなく修業した上で、店を継ぐことができるようになる。

〔関西学院大学 現代民俗学 島村恭則研究室〕ブログ内の弘津遊

「洗濯屋の民俗誌―阪神間における洗濯職人の事例から―」(二〇一五年一月十二日) URL: <https://shimamukwanssei/hatenablog.com/entry/20150112/1421069053> (二〇二二年二月二十五日閲覧)

14 林周二『流通革命：製品・経路および消費者』、中央公論社、一九七七年八月、90～91頁。なお初版は、一九六二年に出版されている。

15 ただし、この『流通革命』が唱えた「流通革命」は、「卸売業と中小売業の数がその後も増え続けた」ことから「不発に終わった。」とされており(石川寛治『日本流通史』229頁)、引用した記述に筆者の主観的な観測が入っている可能性もある。

16 「ナイン」における新道の変化について「さびれる街」(小森潔「教科書」の中の女と男)、「新道商店街も都市化によって大会社のビルの暗い蔭の中に入り、活気を失っている」(田中伸「井上ひさし「ナイン」論——共同体がもたらす蔭——」)などのように指摘される。しかし、現実の変化はともかく、「ナイン」本文においては「上智大学の学生がふえ、近くに大会社のビルがいくつも建ったせいで、道幅四メートル、長さ百メートル足らずのこの新道は四谷でいちばんにぎやかな場所になった。」と語られている。もちろんその「にぎやか」さは「厚化粧だが、なんだか素っ気のない」ものかもしれないが、決してさびれたり活気を失ったりしたものとはされていない。このような誤解は、「わたし」の新道に対する情緒、つまり新道内部の語りにひきずられてしまったものであると言える。

17 タクシーの初乗り運転は一九六三年は八十円であったが、相次ぐ値上げで一九八四年には四百三十円になっている。〔TAXI SITE〕内の「タクシーの歴史・特集」 URL: <https://www.taxisite.com/>

<feature/history/>、二〇二二年二月二十五日閲覧)

また、『日本のタクシー自動車史』(三樹書房、二〇一七年十二月)の「年表 新聞記事にみるタクシー業界の出来事」の「昭和58年」には、「タクシー業界が他産業に比べて著しく劣っているものに退職金と一時金と労働時間がある」(209頁)との主張が載せられている。

18 『運輸白書(昭和51年度)』(運輸省編、一九七七年一月)の「第三章 モータリゼーションの進展」。引用は、国土交通省のホームページ所載のものからである。(URL: <https://www.mlit.go.jp/hakusyof/transport/shouwa51/0203.html>、二〇二二年二月二十五日閲覧)

19 『警察白書(昭和57年版)』(警察庁編、一九八二年七月)の「第六章 交通安全と警察活動」。引用は、警察庁のホームページ所載のものからである。(URL: <https://www.npa.go.jp/hakusyof/s57/s570600.html>、二〇二二年二月二十五日閲覧)

20 『指導書』(数研)の「授業研究」(第二段落)に、国土交通省、土地総合情報システムのデータとして、新宿区の地価が一九七〇年には五〇万円である一方で一九八三年には三〇五万円と六倍以上に跳ね上がっていることが示されている。

21 『朝日年鑑』(昭和57年版、朝日新聞社、一九八二年二月)の「建築・住宅不動産業」(324～325頁)参照。

22 安藤宏「『高等学校国語・新学習指導要領』に関する見解」の経緯と背景」(『日本近代文学』第103集、二〇二〇年十一月)。

23 『高等学校 学習指導要領(平成30年告示)』(二〇一八年三月告示、33頁)。

\* 原稿受理 令和4年2月28日

\*\* 教養教育部門